

# 北神塾

## 第6講「世界の中の日本」③ 一北朝鮮一

2014. 10. 3 (金)

### はじめに

#### 1. 守られてきた国、日本

今まで、外交・安全保障ということでお話をしてきましたが、今日初めての方もいらっしゃると思いますので、簡単に復習をしたいと思います。

日本は歴史的に、外国と真正面から利害がぶつかるような局面というのが、長い歴史の中では実はわりと少ないんですね。日本海とか太平洋に守られてきたということです。何となく我々は戦前のことを考えますから、「そんなことない、たくさん戦争をやっているじゃないか」という風に言いますけれども、この二千年の歴史で、私が数えた限りでは対外的な、本格的な戦争みたいなものは…まあどう数えるかにもよるんですが、本当に十回から、多くても十二、三回くらいしか無いんですね。それでも多いと思われるかもしれませんが、アメリカなんかでは戦後だけでもそれ以上の戦争をしていますし、ヨーロッパなんかものすごくやっています。中国も絶えず北方の民族とやってきたと。ですから、どうしてもこの「外交・安全保障」というのは、世界の中心的な国と比べると、なかなか感覚が違う。

#### 2. 外交の目的は「平和」

私の立場というのは、いつも言いますように、当然「平和」が究極の目的です。ただ、日本では一部で「平和が目的であれば、武力なんて一切持つべきじゃない」、「持っていたとしても、出来るだけ使わずに、話し合いだけであるべ

きだ」という考えが非常に根強いと思います。私は、やはり現実的には武力というものは「抑止力」だと思います。相手が「日本に喧嘩を売るとえらい目に遭うぞ」というような保障が非常に重要であって、日本独自でもそれをやっていかないといけないし、そのために他の国とも連携することが非常に重要です。

「話し合ったら相手は絶対理解してくれる」とかね、そういう立場の人達もいるし、その反動で、最近ちょっと右傾化している中で「とにかく強気で臨めばいい」と言う人もいます。実は後者も、外交感覚があまり無い考え方だと私は思います。下手すると、「とにかくガンガン強気で行っていいし、他の国と連携する必要も無い」、「日本独自でどんどんやるべきだ」と。こういう声が最近増えています。私はこれも非現実的な考えだと思います。

### 3. 最も重要な「同盟国」＝「友達」との関係

この前、仕事でアメリカに視察に行かせていただいた時に、日本ではあまり知られていないかもしれませんが、世界で最も優れた戦略家と言われている、エドワード・ルトワックさんという方と会いました。この方は元ルーマニア人なんですね。ルーマニアっていうのはご存知の通り、イスラムとキリスト教がぶつかって国境が絶えず変更されてきたところです。そういうところでお育ちになって、それこそ日本と真逆で、絶えず侵略されたり…それも、時にはキリスト教徒に、時にはイスラム教徒に侵略される。そういったルーマニアという国の、トランシルヴァニアという地方のご出身の方です。そのルトワックさんも、「外交戦略というのは、究極は、『同盟をどうやって組むか』ということだ」とおっしゃっています。つまり、「友達になる他の国と、どうやって連携するか」というのが一番大事だと。実は彼は、中国というのは戦略的な発想が無い国だと言うんですね。つまり、中国というのは中華文明の国。自分達が一

番中心で、対等な国が無いわけですが、中国六千年の歴史の中で。自分達より下の、朝貢関係にある国、貢いでくれる国との関係しか無かったわけですね。だから、「対等に外交をやる」という発想が中国人には欠落している。ようやく今そういう経験をしようとしているけど、根本的に、伝統的に彼らには「他国と対等に同盟を組む」とかそういう発想が無いから、すなわち中国人達に戦略は無いんだ、ということを断言している人ですね、ルトワックさんは。普通は中国のことを、孫子の兵法とかを例に挙げて極めて戦略的な国だという風に言いますけれども、ルトワックさんというのは、そのくらい、同盟や友好国との関係が外交戦略において非常に重要だということをおっしゃっています。

#### **4. 日本にとっての北朝鮮という国**

今日の北朝鮮についてもざっと一時間くらいでお話ししたいと思いますけれども、北朝鮮というのはある意味で、中国以上に我が国に土足で乗り込んできた国であり、国民を勝手に拉致した国であります。皆慣れっこになってしまいましたけど、日本に向けて、「実験」という名前の下でミサイルを平気で撃ち込んでいる国であります。核兵器を作っている、強烈な、中国以上の独裁国でございます。そういう意味では、日本というのは対中以上に、北朝鮮にはかなり深入りした外交・安全保障政策を既にとっています。ただ、北朝鮮は国力が小さいですから、長期的には中国が一番日本にとって最大の課題ですが、北朝鮮というのは当面の課題として、非常にややこしい国であります。

## 【1】北朝鮮は特殊な国

今日のレジュメはちょっと長くなってしまいました。考えをまとめる時間が無くて、長くなってしまい誠に申し訳ないんですが…そのレジュメを見ていただきますと、まず「北朝鮮は特殊な国である」と。まあそりゃ中国も特殊ですしね、皆それぞれ個性のある国ですが、特に北朝鮮というのはご案内の通り、金家族の独裁の下で…中国もまあ独裁と言えば独裁ですけど、家族でやってませんよね。北朝鮮は家族経営の国です。そういう「独裁の下で、北朝鮮は極めて閉鎖的な軍国体制を維持しながら、他国民の国家的拉致」をしてきたと。…これ日本だけじゃないですからね。韓国からも拉致をしていますし、ハンガリー人、ルーマニア人…いろんなところから拉致をしています。幅広く、国家組織的に拉致をしています。そして核兵器の開発もしている。これについては、多分使えるような段階に来ていると思います。ミサイル開発もしています。開発しているだけじゃなくて、その武力によって人を脅したり、あるいは場合によっては使ったりして、今の独裁体制を維持している。そういう意味では、本当に特殊な国であります。昔は他にキューバとかいろいろありましたけど、大体皆開放して行って。中国もそうですよね、外国資本もどんどん入れて。中国ははっきり言って日本以上に外国資本を入れている。この前も中国に行きましたけど、外車とか、非常に外国資本が入っている国でございます。一方の北朝鮮というのは、極めて閉鎖的な国のまま来ている。それをちょっと念頭に置きながらお話ししたいと思います。

今日は何をお話ししたいかと言うと、皆さん北朝鮮の話はよくご存知なので、まず経緯を申し上げて、さっき私が申し上げたように、話し合いだけで北朝鮮が「ほなもう拉致した方を皆返します。核兵器もやめます」と言うこともあり得ないし、一方で、日本が単独で北朝鮮とゴリゴリやってもなかなか難しいと。

やっぱり「他の国とどうやって連携して、北朝鮮とどう交渉するかということが大事だ」というのが、皆さんにお伝えしたい点ですね。これが唯一の今日のテーマだと思います。

## 【2】対北朝鮮外交の経緯

### 1. 北朝鮮による「国家的」拉致

では、【2】に行きます。これまでどういう経緯があるのかと。これも網羅的ではないですけども、最近から言えば、1. の「日本人が国家的に拉致されたという、看過しえない問題」がまずある。

そして最近から言えば、ここには書いていませんが、1994年くらいからですね。ですからもう二十年前くらいに、初めてプルトニウムの核開発というものをやり始めて、当時カーター元大統領が向こうに行っているいろんな合意をして…まあ裏切られるんですけどね。その1994年くらいから、北朝鮮というのはかなり強硬な態度に出てきたということです。

### 2. 日朝平壤宣言

次に、記憶にも新しいかと思いますが、小泉政権の時に、「2002年の日朝首脳会談において、『日朝平壤宣言』が合意された」んですね。この時に、前の金正日国防委員長が自ら「拉致問題はあった」と、「拉致した」ということを認めて、初めて謝罪をした。その時、拉致被害者が5人帰国されたということです。この「日朝平壤宣言」というものは、日本と北朝鮮の国交回復を謳っているものです。「そのためにこういう条件を満たさないと、国交回復出来ませんね」という共同の宣言です。

### 3. 拉致問題 再調査が行われるも…

そして、2004年ですね。この年に、安否不明の拉致被害者について…まあ要するに5人帰ってきたんですが、「まだまだいるん違うか」ということで日本が調査を要求したところ、金正日国防委員長は「『白紙』の状態からの本格的な調査を再開する」と約束したものの、北朝鮮から渡された遺骨は、横田めぐみさんだとか言っておきながら、DNA鑑定から見たら違ってたと。そういうことで、日本がそれを却下したというわけでございます。

### 4. 再調査打ち切り

2008年には、「出鱈目な骨を送り返してきた」と日本が怒って、それで北朝鮮が調査を全面的にやり直すということで合意したものの、当時の自民党の福田康夫総理が辞任されまして。それをきっかけに北朝鮮は、「福田さんと合意したのに勝手に辞めよって」ということで、「一切再調査しません」ということで打ち切りになってしまったという流れでございます。

### 5. 日朝政府間協議

2012年11月、これは、野田政権の時ですね。この時に日朝政府間協議が開催されて、拉致について今後ちょっと議論していこう、ということになりました。11月にこういう協議をしたんですが、ところが12月1日に北朝鮮がミサイルを発射して、これは野田元総理の方から「不誠実だ」ということで、一切協議に応じないということで協議が延期になりました。

## 6. 対北朝鮮措置の一部解除

2014年、今年ですね。これが最近話題になっている、安倍総理の下で7月に日朝政府間協議が行なわれたというものです。そこで、北朝鮮が拉致被害者らの調査の開始を発表した。日本側は今まで北朝鮮に対して制裁を科していたんです。例えば、日本と北朝鮮の間で人が行き来することは駄目だと。あるいは、人道目的で北朝鮮の船が日本の港に来るのも駄目だと。人道目的でも駄目だと。そういう制裁をしていたんですが、その制裁の一部を解除しております。

## 7. 北朝鮮によるミサイル発射

最後の、2014年3月。この時も北朝鮮は淡々とミサイルを発射しているというところですよ。

振り返ると、まず、拉致被害者の方が5人帰ってきたと。これは確かに小泉さんの成果だと。しかし当然それだけではないだろうというのが、我々の常識かと思えます。

そして北朝鮮の問題を考える時には、どうしても日本人は拉致に集中しがちです。拉致ももちろん重要な問題の一つですが、世界的に言えば、やはり核兵器、ミサイル。こういった大量破壊兵器をどうするのかと。これが一番地域を脅かしていると。もっと言えば、核兵器とかああいう兵器の技術がどんどん流出して、中近東に行ったりして核拡散につながって世界がもっと不安定になってくる、というところを考えていかないといけない。そういう意味では、日本の外交だけじゃなくて、アメリカの外交についても、北朝鮮に関しては本当に上手くいっていないということが言えると思います。

### 【3】対北朝鮮外交の総括

続いて、【3】に行きます。対北朝鮮外交の総括、ということですが、これは私が勝手に総括させていただいたものです。当たり前のことを書いているんですが。

#### 1. 拉致被害者5人帰国も、その後調査進展を見ず

まず1. です。5人の帰国を果たしたことは成果ではありますが、他の被害者に関する調査や解決については進展をほとんど見ていないという状況です。まあ安倍さんが今年の7月に再調査ということで協議をしました。ですがこれも最近新聞にも出ていますが、北朝鮮側が「大体今こんな感じですよ」という中間報告を9月中くらいに日本に返答するという約束になっていたのが、一方的に延期されたと。わりと皆期待をしていたんですが、北朝鮮側の対応がだんだん消極的になってきているんじゃないかというのが、一般的な見方です。

#### 2. 核・ミサイル問題の進展と決裂

次の2. ですが、他方、拉致問題じゃなくて核・ミサイルの問題については、1994年にカーター大統領が「枠組み合意」というものをやりました。また2003年には、日本も含めて「六者会合」というもので何とか北朝鮮に迫っていったんですが、一時的な進展を見たものの、結局は決裂していると。ちなみに「六者会合」というのは、日本も入っているしアメリカも入っています。ロシアも入っているし、韓国、もちろん北朝鮮、そして中国。この6つの国ですね。中国は議長国です。



### 3. 北朝鮮の軍事力強化

続いてこの間…要するに、日本が拉致問題について色々話し合いをしている、制裁も科している、国連も制裁を科している、アメリカとか中国も、ロシアも韓国も含めて皆六者会合で北朝鮮をなだめすかそうとしている。そんな間にも、北朝鮮は核兵器開発を着実に進めてきていますし、ミサイル開発にしても、数次にわたる弾道ミサイルの発射、そして新たに中長距離弾道ミサイル…これはアメリカに届くくらいのもを開発しているという風に、アメリカの CIA は分析をしています。このように、非常に遠いところまで飛ぶような技術の開発にも成功していると。つまり、日本もいろいろやっているけど、どんどんどんどん北朝鮮は力をつけてきているんじゃないかと。

### 4. 強硬な外交手段をとってきた日本

4. に参ります。我が国は、2006 年の北朝鮮の核実験を契機として、非常に強硬な外交手段をとってきました。「累次に渡って人・物・金の移動を厳しく制限し、人道支援を含むあらゆる交流を絶って」きました。これは、国連が北朝鮮に対していろいろと制裁を決めてるんですね。日本というのは、国連の制裁もやってますし、それ以上に強硬な制裁も、実はずっとやってきております。それでも何も進展が無い、ということですね。これ以上出来ないくらいの制裁をしていると思います。軍事制裁を除いてね。軍事制裁はもちろんしていません。

## 5. 軍事的脅威となる北朝鮮、解決の見えない拉致・核・ミサイル問題

では、5. ですが、「しかし、拉致・核・ミサイル問題について、とても解決に近づいたとはいえない」と。

6. 「総括すれば、拉致問題では再調査が進まない中で、北朝鮮は以前より軍事的に脅威となっている」と。つまり、皆の外交努力というものが基本的には失敗に終わってきている、という風に総括出来るんじゃないかと思っております。

### 【4】北朝鮮外交の6つの歴史的教訓

#### 1. 北朝鮮の軍事的挑発の目的は「対話」にあり

続いて【4】では、北朝鮮外交の歴史的教訓を6つほど挙げております。教訓一、「北朝鮮の目的は何なのか」と。何でこんな「ならず者国家」みたいなことをやっているのか。これはいろんな解釈があるかもしれませんが、大体専門家は、北朝鮮の外交目的は、軍事的な挑発によって、主には米国、そして日本などの他の国との「対話」に持ち込むことにあると。実は北朝鮮は対話したがるんですね。まあ小学生の時に、注意を引くために、自分の惚れた女の子に石投げたりしますよね。一種そういうものです。そんな可愛い次元じゃないですけど、北朝鮮はただ単に喧嘩を売りたいというわけではないと思います。これは専門家の中で大体一致した意見ですね。「対話をしたい」と。でも、対話をするためにまず脅したりして注意を引くと。何でアメリカと特に対話したいのかと言うと、アメリカとの交渉で、核開発とかミサイルを切り売る。「やめます」とか言うことによって、その見返りとして、関係各国から経済支援を得たい。経済的に困ってますからね、北朝鮮は。だからちょっとお金を引き出す。ひいては、今の北朝鮮の金一族による独裁体制というものを認めてくれる、

そしてそれに対して何も妨害をしない国際環境を確保したいと。だから究極の目的は、アメリカと平和協定を結びたいというところにあるわけです。これはやっぱり重く見ておかないといけません。なぜなら、この目的が達成されない限り、北朝鮮が核、ミサイルを放棄するとはちょっと考えられない。そして、もっと言えばね、古今東西の例を見たら、一旦核兵器を保有した国っていうのは、なかなか手放すことはないです。二つだけ例外があります。一つは南アフリカ。これはアパルトヘイトの体制をやめた時に、マンデラ元大統領が「新しい南アフリカだ」ということで、核兵器を放棄しています。もう一つの例は、ウクライナですね。ウクライナが独立をした時に、核兵器を放棄しています。その二つの事例がありますが、特にこの核兵器については、「やめさせる」という目的はなかなか難しい、ということです。それをお伝えしたかったのが教訓一。

## 2. 拉致問題 日米韓の温度差を利用する北朝鮮

続いて教訓二ですが、拉致問題ですね。教訓一では核・ミサイルの話をしました。日本人が最も関心のある拉致問題については、アメリカや韓国も、日本がそういう問題を抱えているということを認識していますし、「それはけしからん話やね」という風に配慮はしているけれども、当然温度差があります。

「拉致は何とか解決しないといけません」という日本ほどの意識は、アメリカや韓国にはございません。北朝鮮は、その日米韓の温度差を利用しながら、それぞれを分断しようとしていますね。仲違いさせようとしている。仲違いとまで行かなくても、協力的ではない関係にして、自分の利益を最大化しようとするのが北朝鮮の戦略です。こうした現状が続く限り、我が国がいくら自分で厳しくやっても、「よっしゃ、北朝鮮にガツンとやってやった」という一種の自己

満足はあるかもしれないけど、アメリカ、韓国がついてきていなかったら、北朝鮮にとっては痛くも痒くもないんじゃないかと…いや、そこまでとは言えませんがね。でもまあ少なくとも痛くはない。痒みはあるかもしれない。そういったことで、北朝鮮が拉致問題について誠実に応じることは期待出来ないだろうという風に、私は思っています。

### **(1) 小泉外交が拉致問題を部分的に解決した要因**

レジュメ教訓二の(注1)ですが、私が言っていることの一つの根拠として、小泉さんがなぜ5人帰すことが出来たのかと。当時アメリカはブッシュ大統領で、イラク戦争をやっていました。その頃アメリカは、イラクとイランと北朝鮮が世界の三大ならず者国家だという方針を掲げて、めちゃくちゃ厳しい姿勢で北朝鮮に臨んでいたんですね。韓国もね、あの当時は北朝鮮につれない態度をとっていました。だから北朝鮮はやっぱり「やばいな」と、「孤立してるな」と感じる中で、少なくとも拉致被害者を5人くらい帰して、「せめて日本とだけは仲良くしたい」と、そういう思惑があったと思います。アメリカや韓国が北朝鮮と対話をしている段階だったら、なかなか5人は帰ってこなかったんじゃないかと思います。

### **(2) 拉致問題進展に影響を与える北朝鮮の状況**

続いて(注2)、今も何で北朝鮮は消極的にせよ拉致問題に関して応じているのかというと、アメリカは今北朝鮮に対して非常に厳しい姿勢をとっています。オバマさんは話し合いにも一切応じていません。もっと言えば、中国が北朝鮮に対して、今「ちょっとやり過ぎやぞ」と思い始めてる。「今までは俺達の言うこと聞いていたのが、最近は聞かない」と。中国にしてみれば、北朝鮮

がどんどん勝手に核兵器を作っていて、自分達の隣に危ない人が住んでいるような、そんな状況です。そういったことで、中国も北朝鮮にかなり厳しくあたっています。私は、だからこそ解決する余地があると思っているんです、逆に。つまり、他の国と上手くいっていないからこそ、日本と上手いこと話が出来らんんじゃないかと。ただ、小泉さんの時に「5人帰した」ということになっていますが、北朝鮮は「一時帰国」ということで約束しているんですね。ですから、北朝鮮側からすれば小泉さんは約束を破って引き止めちゃった、ということがあります。ですから今も、拉致問題が解決するかどうかというのは非常に微妙な問題だという風に思っています。ただ、孤立する中で、北朝鮮が話し合いをするふりはしたがる、ということですね。

### 3. 对中国依存を深めている現状

教訓三。これまでの北朝鮮に対する制裁っていうのは、日本単独でやってきて進展が無かった。金体制の改革や崩壊にもつながらなかった。よく、「いわゆる『兵糧攻め』にしたら金体制が崩れるだろう、独裁国家が崩れるだろう」と言う方がいますが、少なくともこの20年間、全然そんな効果は無かった。制裁をすればするほど、北朝鮮は中国に依存するようになって、中国と貿易を増やして、むしろ中国への依存を深めてしまったという風に言えます。その結果、日本とアメリカと韓国の三カ国は、自分達の間だけじゃなくて中国の協力も得ないと、北朝鮮に対して影響力を及ぼせないという状態になってるんですね。ですから中国が結構北朝鮮に影響力を持ってしまって、日本とアメリカと韓国だけでは手に負えなくて、中国も巻き込まないといけない。それが先程言った六者会合で、中国を議長国にした理由です。

#### 4. 拉致問題の解決に「話し合い」は不可欠

続いて教訓四。我が国はこれまで、制裁措置以外の新たな外交手段を模索する努力を怠ってきた。つまり、制裁してたらそれだけでカッコいいと、「俺ら、北朝鮮に厳しくやっとな」と。それは日本の中での自己満足に過ぎず、今申し上げた通り何の進展も無いわけです。すなわち、政府間の交渉においては、対話を行う機会を戦略的に捉えず、北朝鮮に対する強硬姿勢を、下手すると政治利用する面さえあったと。「俺は北朝鮮に厳しくやってる。とにかくあいつらにどんどん制裁をする。話し合いなんか一切応じない」という対応をとってきました。もちろん場合によってはそういったことも必要です。相手が不誠実な対応をとっている時とかは、やむを得ないでしょう。しかし、私達がその対応をとっている間は拉致問題は一切解決しませんよ、ということを申し上げているわけですね。残念ながら、拉致された以上は、基本的にはどこかで話し合いをしなければ解決出来ない。ですから、この話し合いを戦略的に「どういうタイミングで、どういう体制でやるのか」ということを真面目に考えないと、ただ単純に北朝鮮を叩いているばかりでは、拉致問題は上手くいきません。ただし、政府と全く違うところで勝手に議員とかが北朝鮮と対話をするというのは、「二元外交」と言って、単にことをややこしくするだけで、私は慎まなければならないと思います。これが教訓四。

#### 5. 紛争を避けたい米国、南北統一を目指す韓国

五つ目の、教訓五に行きます。米国や韓国は、「軍事的に優位を保ちつつも、半島における紛争については、それに伴う犠牲を踏まえれば、極力避けるべきだ」と考えています。韓国とアメリカの軍事力の方が北朝鮮より強いという立場はとりながらも、実際の紛争は、極力韓国もアメリカも避けたいということ

です。何でこれを私が強調しているのかと言うと、日本の過激な評論家が…まあ評論家は何でも言えますから、責任取らなくてもいいですから。「そんなもの、話し合いも何も関係無い。とにかく自衛隊を送り込んで拉致被害者を救出するんだ」とか、あるいは「アメリカと一緒に北朝鮮を爆撃すればいい」とか、そういう人がいますけれども、アメリカも韓国も、そんなことは極力避けたいと思っています。韓国にしてみたら、「お前ら日本人は責任取れるのか」と。「紛争になって、真っ先に火の海になるのは韓国だ。ソウルだ」と。アメリカだって、「はっきり言って拉致問題は日本の問題や」、「何でアメリカの兵隊が日本のことで死なないといけないんだ」というのが、彼らの本音です。ですから、なかなか日本一国でやりたいとか言っても、こちら側の味方でさえ「紛争なんて、そんなもの話にならん」と考えている、という状況です。韓国なんかは、同じ民族として…私も拉致問題のことで何回も韓国に話し合いに行っていますが、彼らの方がたくさんの拉致被害者がいるにもかかわらず、日本ほど強硬に北朝鮮に対して主張しません。なぜなら、彼らは「いずれ統一した朝鮮国家というものを作りたい」と考えているからです。これがやはり彼らの夢なので、こういうことも我々は頭に入れておかないといけない、ということです。

## 6. 北朝鮮問題における中国の存在

最後の教訓として、教訓六。アメリカと韓国の話をしてきましたが、次は中国について。中国は、冷戦時代に比べれば、北朝鮮に対して今距離を置いています。特にこの一年くらいは、北朝鮮に対して厳しい態度をとっています。しかしね、一方で日本とアメリカと韓国が北朝鮮に影響力を行使…まあ影響力を行使と言いますがけれど、例えば、軍事的に攻めてくるとかね。あるいは、北朝鮮との話し合いを中国抜きで勝手に進めていくことに対しては、中国はめっちゃ

くちや嫌がるでしょう。こういう方針は、中国主導の「六者会合」っていうものにも表れています。六者会合では、日本もアメリカも皆入って、中国を議長にして、わざわざ中国の顔を立ててあげてやってきたけど、結局は中国は本当に核ミサイルをなくしたり、拉致問題を解決する、ということを本当には望んではいないように思います。結果として、時間稼ぎの場に利用されてきたのではないのでしょうか。いずれにせよ、今日のこの北朝鮮のお話だけでも、こんなにいろんな国々がね、それぞれ利害を持っていることが分かるかと思います。だから日本がいくら「俺はこうするんだ！」と言っても、なかなか通らないというのが外交の非常に難しいところだ、ということが理解出来るかと思います。

## 【5】具体的な対北朝鮮方針―日米韓の連携強化のために

【5】に入りますが、ではどういった方針があるのか。これは私もいろいろと考えてきたんですが、私は日本単独ではなかなか難しいという風に思っています。ですので、まず前提として日米韓の連携を強化しないといけない。そこで「日米韓の連携強化に向けて」…まあ今は韓国とは全然話になっておりません。向こうの大統領も喧嘩を売るようなことばかり言っていますから、当面はこれは難しいんですが、いずれこういう形にしていけないかと思いません。アメリカは当然日本の軍事同盟国ですし、韓国についても、韓国抜きで北朝鮮問題に取り組むのはなかなか難しい。しかも韓国というのはアメリカと軍事同盟を結んでいるわけですから。アメリカとしては、日本がいくら「韓国を外しましょう」と言っても、アメリカは「そんなわけにいかんやろ」と。「北朝鮮の侵略に対して最前線で命張ってるのは韓国だ」と。「それを無視して勝手に日本とアメリカで物事を進めるとするのは非常に難しい」と。そういった状況です。



## 1. TCOG を活用

ですから、非常に面倒くさいですけども、レジュメ①の中で説明します  
“TCOG” というものを活用して、何よりも重要なのは、日本と米国と韓国で、  
北朝鮮に対する統一的な方針というものを練り上げることです。それをしないと無理だろうと。具体的には、この三カ国で、既に“TCOG” という枠組みがあるんです。ここで北朝鮮問題について話し合いましょう、という位置づけになっていますが、ほとんど使われていません。立ち上げた最初の頃だけでした。よくあることですが、政治家とか官僚がその時だけ盛り上がって、何か枠組みだけ作って、結局それを放ったらかしにして形骸化する…という枠組みの一つです。実際 2003 年には、この“TCOG” において、アメリカ・韓国・日本の代表団によって、「三カ国間の継続的かつ緊密な協議と調整が、北朝鮮による核問題に対処する上で依然として極めて重要であること」が再確認されてるんですね。つまり、やっぱり日本とアメリカと韓国が中核だと。この三カ国がやっぱり話し合いをしていかないとだめだということを、既にこの TCOG という会議で再確認しています。一方で、六者会合とかもありますけれども、先程申し上げたように、これは中国の時間稼ぎに振り回されているだけなんで、この六者会合よりは、私は日本と米国と韓国でやった方が、ずっと効果的だという風に思っています。

## 2. 拉致・核・ミサイルに関する統一方針の策定

次に②、じゃあ何を決めるのかということですが、〈拉致、核、ミサイルに関する統一方針を策定〉する、と。結局、核とミサイルの問題というのはね、だいたい皆共通の感覚があるわけですよ。北朝鮮みたいな、いつ暴発するか分からないような国にあんな大量破壊兵器を持たれてると、周辺の国は非常に物

騒で仕方ないと。これは出来るだけ抑え込まないといけないということで、意識が大体統一されています。

### **(1) 「拉致問題＝人権問題」という主張の重要性**

唯一微妙な問題が、拉致問題ですね。さっき言ったように、アメリカと韓国に関心がどうしても軍事的な問題に行きそうなところを、日本が孤立しないように拉致問題の重要性について、TCOGの会議の中で粘り強く理解を求めていく必要があると。その時に特に韓国との関係の中で重要なのは、拉致問題を、「単に日本だけの問題じゃなくて、これは人権問題だ」と主張することです。「日本だけじゃない、世界に共通する問題だ」と。「韓国の皆さんだって、ハンガリーの人もイタリアの人もルーマニアの人も拉致されている。勝手に国に土足で乗り込んできて人を拉致するというのは、人権問題以外の何物でもない」という立場で主張した方が、広がりが出ます。そうじゃないと、「何とか僕達の問題を解決してくれ」という、一種日本だけの陳情みたいに捉えられてしまっているんです。だからやっぱり、普遍的な人権問題としてアメリカ・韓国に理解を求めることが大事だと。

### **(2) 南北の平和統一等、戦略的問題への積極的対応の必要性**

次に(2)、同時に、日本としては核、ミサイルという、もっと戦略的な問題についても積極的に対応しないといけないですね。さらには、韓国が最終的に求めている南北の「平和統一」の際には、当然ながら日本として対応の負担を覚悟しなければならないと。ある程度の経済的支援とかね。これはなぜこんなことを言っているのかというと、平和統一という最終的な絵を描いていかないと、なかなか韓国というのは、積極的に動きません。やっぱり彼らの究極の

目的は「平和統一」、「統一国家」ですから。ですから TCOG の中で、「日本もそういうものを望んでいますよ」ということを訴えていかないと、彼らの協力も得られないだろうという風に思います。つまり、日本が核、ミサイル、あるいは経済的支援を含む「平和統一」に積極的に関わるためには…逆に言えばレジュメに書いてあるように、「北朝鮮と韓国の皆さんが統一したいなら、あるいは核やミサイルの問題を解決したいのであれば、拉致問題の解決が大前提ですよ」ということを、交渉で潜り込ませないといけない、ということです。こうした問題を全て統一するような統一案を、この TCOG という、既にある枠組みをもう一回再生して、三カ国でとりまとめていかないといけないと思います。

### 3. 共同の危機管理計画を作成し、多様な事態への対策準備を

次の③に、「共同の危機管理計画を作成する」とあります。先程は大きな外交方針について申し上げましたが、もっと身近な危機管理ですね。これはやっぱり、北朝鮮みたいな国は、いつ何が起こるか分からない。もしかしたら、勝手に独裁制が崩壊して混乱が起きることもあり得るし、北朝鮮がそれを嫌がって、急に外国に対して侵略をすとか。まあ、そういうこともあり得るわけですね。何をしでかすか分からないような状態なので、その有事の際の危機管理計画というものを、やっぱり三カ国で作っておかないといけないと。例えば、邦人をどうやって救済するのか。それは韓国にいる邦人も北朝鮮の拉致被害者も含めてね。そういう時にどうやって救済するのか。そういったことを考えないといけない。また、難民ですね。大量の難民が日本海を渡ってくる可能性がある。これを果たしてどうするのか。軍事的紛争に近い事態に対してどうするのか。これは日本だけではなかなか対応出来ない。だからこそ、アメリカ・韓

国と連携していかなきゃいけないし、事前に統一方針を作らないといけない。ちなみに、そんなものは今存在しません。ですからそういったことが起きた時には、その時にそこで「アメリカさん、韓国さん、何とかしてください」と場当たり的に無責任にお願いをしないといけないような状態になっているということですね。

#### **4. 日米韓の協力強化と、北朝鮮へのアピール**

次の④ですが、軍事的な協力を深める。やっぱり一方で、日米韓が「非常に緊密に連携をしています」ということを北朝鮮に示すことです。北朝鮮に対し、「日本とアメリカと韓国は、武力によって一步も下がりませんよ」と、「ビビりませんよ」ということを示すために、日本と韓国とアメリカの軍事共同演習みたいなことをやっぱりやっていく必要があると思います。また、外交的な連携というものは、軍事的な協力を強化することによってさらに緊密になります。これは、日米韓の関係も緊密になるということも期待できる、ということです。

#### **【6】日本独自の外交の模索—独自の情報収集を**

今、日本と米国と韓国の話をしましたが、日本独自でやらないといけないことももちろんあります。それが【6】の話で、日本独自の外交も同時に追求すべきだと。

##### **1. 脱北者からの情報の戦略的な活用を**

「日本独自の外交」、これはもちろん軍事的なものもある程度大事ですけども、一番大事なのは、やっぱり情報収集活動ですね。情報集めをすることです。例えば、私達も拉致問題に携わってきて、私が衆議院議員をやっていた8

年間、最初から最後までずっと、拉致問題特別委員会というところに所属して韓国に行ったり中国に行ったりしていましたが、やっぱり情報は中国や韓国の方が圧倒的に持っています。それはなぜかと言うと一つは、脱北者というのがありますよね。北朝鮮から逃げてきた人達。日本というのは、そういう人達を一切難民認定せずに、関わらないわけです。受け入れもしないんですね。それはもちろん、あまりそういう人達を入れるとややこしくなるという問題もあるのかもしれないですけど、戦略的に考えると、結局この人達が色々な情報を持っているんですね。政府高官みたいな人達が脱北者の中にはいますから。そういう情報を、日本は直接取っていかないといけないと思います。結局、我々日本側が韓国や中国に行って拉致問題について情報を収集する時には、脱北者の情報を中国とか韓国が握ってるから、そういう話をしているだけなんですね。それだったら、あまり中国や韓国に頼るんじゃなくて、日本が独自に直接そういう情報に接する必要があるんじゃないかと思います。

## 2. 在朝鮮大使館等、各国機関との連携を

次に（2）、実は北朝鮮には、たくさん大使館があります。日本は国交が無いですから、なかなか想像し難いかもしれませんが、実はヨーロッパの国々はほとんど北朝鮮と国交があります。そういった国の大使館員と、常に接触をしたり、あるいはそういった人達に「拉致問題について情報収集してくれ」というお願いをすることも大事です。こういうことは、皆さんにしてみたら「普通やってるんじゃないの？」と思われるのかもしれませんが、もうこれは私も驚きましたけれど、日本の外務省はそんなことしておりません。例えば、一番単純な話はね、「こういう人達が拉致被害者です」という写真があるわけですね、日本に。そういう資料を、北朝鮮に大使館を置いている何十カ国の国の大

使館にちゃんと渡して、説明して、「こういった人達を我々は拉致被害者として抱えています」と。「皆さんのパイプで何か情報があったらぜひ教えてください」と。これは実は私が現職の時にやったんですが、私も「これくらいのこと当然これまでもやってるかな」と思っていたんです。ですが、「こんなこと聞いたこと無い」と。ベルギーの大使館の人達も、フランスの大使館の人も言ってました。「日本は、写真が出せるくらいまで被害者をちゃんと特定しているのか。そんなことも知らなかった。何となく拉致被害の問題があるということは聞いていたけど、そんな情報は初耳だ」と各国の大使館員が言うくらい、外務省は何もしておりません。さっきの TCOG の話も、日本とアメリカと韓国…「北神さん、そんなこともうやってるでしょう。拉致問題のことでも当然アメリカに説明して、アメリカの理解を得ているでしょう」と思われているかもしれませんが、私はそんなにやっていないと思います。TCOG でも、今まで役人同士がやってるだけですわ。だから各国の大臣、防衛大臣、外務大臣くらいがそこに行って、皆で一堂に会して、「ちゃんと政治力でこの問題について統一方針を立てましょう」ということをやっぱりやっていかないと、話にならないという風に思っております。

## 【7】日本独自の危機対応が必要

最後に【7】、日本独自の危機対応。日本が特に危機感を持たないといけないのは、核による威嚇と、現実的脅威としてのミサイルですね。これは百発百中ではないんですけども、やっぱり日本版の弾道ミサイル防衛。北朝鮮のミサイルというものに対する対応をしていかないといけないという風に思います。なかなかこれは難しいです。ここは議論が分かれるところです。「そんなお金を使って、アメリカの軍需産業を潤して、本当に北朝鮮のミサイルが飛ん

できて、撃ち落とせるのか」といった場合もあります。これはなかなか難しい判断ですが、「抑止力」という意味でもありますし、こっちは常に戦う体制でいるということを示すという意味でも、大事だと思っています。ですから私はやった方がいいと思います。でも確かにここは微妙に判断が分かれるところですね。あともう一つは、北朝鮮には特殊部隊というものがあるんですね。一人で十人分くらいの破壊力のある兵隊が北朝鮮にはいます。まあ他のどこの国でも大体いますけども。私がそういった人達が怖いのは、日本に侵入を…下手するともう既にしていて、何かあった時にこの人達が騒ぎ出すとか。例えば、考えるのも嫌ですけど、原発の施設にテロをすとか。福島原発は津波で電源が無くなったわけですね。それで冷やすことが出来なくなった。それで水素爆発を起こして放射能が外に出たわけですね。あれは津波で電源が無くなりましたけど、送電線が入ってますよね。例えば福井でも送電線は一つしか無いです。それをちょん切っただけで電気はもう失われます。もちろん福島の後には、電源車という、車から電源を起こすような対応をしていますけれども、そういったことを考えても、いわゆる特殊部隊に対してどのように我々が戦っていくのかということも、考えていけないと思います。これも政府では一切何も考えていない状況です。

## **おわりに — 拉致問題で最も難しい問題**

以上、ちょっと詳しくお話をしました。北朝鮮については、そう簡単に拉致問題とか、特に核、ミサイルを解決出来るとは思えません。残念ながら。先程も言ったように、特殊な国ですから。他の国とまともに貿易して交流する、という意識がそれほどございませんから。そういった国とどうやって接するかというのは非常に難しいですけど、少なくとも、日本一国でやっていくという

のは非常に難しい。拉致問題については、まだまだアメリカとか韓国に協力を訴える余地がある。簡単に言えば、「この拉致問題について皆さんが真剣にやらなければ、日本もあなた達の核ミサイルには真剣になれませんよ」と言うくらいの交渉を、私はアメリカと韓国にすべきだという風に思います。今のところそんなことはしていません。そこで統一的な方針を作って臨むしか、道はなかなか難しい。

最後に一番微妙な話をしますけれども、じゃあ仮に今安倍さんが拉致問題の話で上手いことやって、多少北朝鮮もやる気になってきたとしましょう。その時に何が一番難しいのか。これはね、日本と北朝鮮の政府の間で何を以って「この話は解決」と見なすか、ということを決めることですね。日本人にしてみたら、「そりゃ全員帰すことやろう」と思いますわね。でもその「全員帰す」ということとは何なのか、ということなんです。「じゃあ何を以って『全員帰す』ということにするんですか」と。「北朝鮮の今回の調査を以って、それをちゃんと信用します」と。「そこで10人帰ってきたとしましょう。そしたらそれで『全員』とします」と言うのか。それとも、日本もそこに入って、何か一緒に調査をするということで「解決」と見なすのか。…言いたいこと分かりますか？なぜなら北朝鮮にしてみたら、彼らは一回裏切られたんですわ、小泉元総理に。「5人一時帰国した」と。「これで終わりですよ」と。「謝罪もしましたね」と。それで日朝平壤宣言まで作ってね。「日本と北朝鮮はこれで国交を回復するという話だったのが、お前ら急に『5人だけじゃない、もっといるはずや』と言い出した」と。つまり、北朝鮮にしてみたら、日本は後出しジャンケンした、という風に見ているわけですよ。これは日本人にしてみたらとんでもない話ですけども、彼らの立場からするとそうなんです。で、私が言いたいのは、彼らの立場が正しいというわけじゃないですよ。私が言いたいのは、「今度は、『日



本はこれを以って、あとは一切文句を言いません』というものを示してくれないと、我々は応じる意味が無いです」と北朝鮮が考えているということです。これはなかなか難しい。「これをやっぱり決めないといけない」というのは、外交官でも、拉致に詳しい政治家でも安倍総理でも、私はこの話を現職時代にしたことがあります、「その通りだ」って皆分かってるんです。でもこれと言えないんです。なぜなら、言った途端に、拉致被害者のご家族の方や、あるいはその取り巻きの人達が、「何を言ってるんだ」と。「全員帰すのが当たり前だろう」という、すごく感情論になるわけですね。こちらとしては、「もちろん『全員帰す』のは当たり前なんだけど、それをどういう定義で『全員帰す』ということにするのか、というのが問題なんです」と言っても、「いやいやいや、それは『みんな帰す』んです」となってしまう。これはもう、国内問題なんですね。だから今日本というのはそういう中で、今の安倍さんの北朝鮮に対する努力でも、実は拉致被害者家族の一部はものすごく怒っているわけです。「妥協し過ぎだ」と。これはね…難しい。非常に難しい。けれども、ここを乗り越えないと…多分アメリカと韓国をも説得出来ないと思います。アメリカと韓国だって、「そんなに拉致問題解決したいんだったら俺らもやるけど、お前らは何で満足するの？」と「何を以ってして、『これで僕達はもう拉致問題に関して一切言いません』とするの？」と。そこを、どういう形でやるのかも問題です。内々で、一部の外交関係者だけが握って本当に秘密裡にやるのかとか。ここが、拉致問題の中でもほとんど報道とかで語られない、一番難しい問題です。以上です。ご清聴ありがとうございました。

〈第6講終了〉